



日本の南極観測の拠点である昭和基地の主要部。1957年1月、東南極の大陸の縁から4km離れた東オングル島上に開設された（南緯69度、東経39度35分）。管理棟（中央の3階立ての建物）、発電棟、居住棟、観測研究棟、環境保全関連施設、衛星受信棟、倉庫など49棟の建物のほか、アンテナや燃料タンクが点在する。日本の南極観測基地はほかに、みずほ基地、ドームふじ観測拠点、あすか観測拠点がある。ドームふじ観測拠点は氷床深層掘削を目的とした大陸内部の基地。みずほ基地とあすか観測拠点は、かつての越冬観測基地で、現在は内陸へのベースとして使われている。

南極観測船「しらせ」 神田啓史

南極観測の継続的実施は輸送船の規模、砕氷能力に大きく関わる。3代目の「しらせ」は、実に19回中18回接岸に成功した。さらに、過去にはオーストラリアの観測船を救援するなど、世界の砕氷船の中でも屈指の性能を誇る。この輸送能力は昭和基地の近代的な観測施設の整備のみならず、あすか観測拠点やドームふじ観測拠点の建設にも大きく貢献してきた。また、しらせは海上自衛隊に所属する自衛艦であるが、海洋では観測船であり、学生が参加した海洋観測にも寄与している。

「しらせ」は第25次隊（1983年）より就役しているが、毎年11月14日東京晴海港を出発、オーストラリア西海岸のフリーマントルに入る。その後、12月末に昭和基地に接岸する。基地では約2カ月間、物資輸送など観測隊を支援し、3月21日にシドニーを経由し、4月13日に晴海に帰港する。「しらせ」の全行動日数は5カ月になるが、南極圏での行動は3カ月である。現在、観測隊は日本とオーストラリアを航空機で往復しているの、観測隊の「しらせ」による行動日数は約4カ月である。



「しらせ」の船名は南極探検の偉業を成した白瀬矗（のぶ）中尉（1861～1946）に因んでつけられた。全長134m、幅28m、基準排水量約1万1700トン、最大速力約19ノット。1.5mの氷を3ノットで連続砕氷が可能である。乗組員約170名、観測隊員60名のほか、同行者が数名乗船する。